

発表者：廣田朋子さん 「患者・家族の情報探索と意思決定—1 事例紹介を通して—」

<患者・家族にどのような情報を与えているか？クリティカルパスなど>

- ・ 患者・家族はたどるコースが見えてないから不安であろう。どこまで提供するか？
- ・ どういう形態だといいたらうか？患者の望む情報（次に何をしたいか）を考えながら、提供する情報を考えないといけない。終末期であればなおさら、知りたい情報や知りたくない情報があるだろう。対象に応じた情報提供のあり方が必要。
- ・ 入院中、看護師となんらかのやりとりはあったか？
- ・ 前半はほとんどなかったが、手術をした病院で受け持ってくれた看護師がパワフルであった。母も評価していた。近くの病院で2ヶ月くらい入院したが、看護師が吸引しながら「今後どうされますか？」と聞いてきた。声のかけ方がよくソフトな感じで聞いてくれたのはよかった。もう意思決定したあとだったのでタイミングもよかった。
- ・ 療養先の病院で看護師に相談されることはあったか？
- ・ 母は行動派で、市町村の窓口などで聞きまわっていたため、あまり看護師に相談することはなかった。振り返ると、祖母の今後の状態を予測できなかったことが不安だった。
- ・ 祖父が亡くなる時、難病であった。本も見せながら一緒に考えてくれた医師がいた。母がPCで調べた結果、どれにも「予後が悪い」と書いてあり、知るのが怖くなり調べるのをやめた。本当に分からないことだけを聞く、というように姿勢を変えていった。対象によって知るのがこわい人もいる。（※この発言は発表者のものではない）
- ・ 臨床にいたときは、手術に関して多くを知りたい人と知りたくない人がいた。「同じ病気で手術を受けた患者さんをご紹介しましょうか？」など。こっちがどのような情報を持っているかを提示し、患者に選んでもらうスタイルをとっていた。
- ・ ある健康相談の場にも情報探索行動のために来訪する人がいる。それら利用者には自分が探している情報を知っている人とまったく知らない人がいる。これに対して看護職者は利用者に主治医がいれば、主治医に聞きたい事を整理するお手伝いをする。さらに看護職者は利用者が情報を受け止める準備ができているのか探っていく。本人は受け止められるのか？サポートがあるのか？を考えている。また同時に、看護職者はトータルに先が見通せるので、利用者へ伝えるべき情報を選択し提供している。しかし、それら情報の提供だけで利用者のニーズが満たされているかどうか必ずしも確認してはいないだろう。今後、看護職が健康情報を提供するときどういうアセスメントが必要なのか考えていくことが必要だろう。
- ・ テーマを「ニーズ把握」にしようか悩んだが・・・対象のニーズ把握をどのようにすればよいか。

- 情報をバランスよく、求められたときに提供することが望ましいのでは？
- ほしい情報は医療だけでない。生活に関する情報もナースは提供できるのではないか？
- 人はなんのために「情報探索」やるのか？情報を必要としたいときというのは、現在の状態を「問題」と思っているときではないか。援助する側は、対象は現在の状況を問題と感じているか？を第一に考える必要がある。対象を放っておくと問題にぶち当たると予測される時に伝える、選択肢を提示してメリット、デメリットを説明する、などの方法がある。ただ、どのスパンで対象の今後をみていくかが難しい。察するのは難しいので、今本人が思っていることを本人が分かるように援助していくべきではないだろうか。「私のカルテ」をつくって、対象が書き込んだ場合、ニーズがあると判断し介入するなど会話以外のツールがある。お互いが持っている情報が分からなければ、コミュニケーションはとれない。
- 情報探索がうまくいかない原因のひとつとして、コミュニケーション不足がある。サポートというよりはコミュニケーション。それがサポートになるのでは？対面でうまくコミュニケーションがとれない人は違う媒体が必要ではないだろうか。